

# ヤコブノハシゴ 屋木符の樹冠

浸水をただ待つ街、江東区。海面よりも低い地盤に下町文化が根づいた街が形成されている。この地帯全ての住民が区内にある高台へ避難する必要がある。住民が避難できるポケットパークを積層した建築の提案。この提案は土木的ではなく建築的な手法を用いて問題を解決し、街の里山的存在として経年変化していく。生物的に成長してゆき、文化と共生していく場を創り出す。



## 01 風情あふれる街が常に浸水のリスクに怯えている



東京江東区大島  
海面よりも低い土地に街が広がる江東区は、歴史的に常に水と関わりを持って発展を遂げてきた。そこには江戸時代から受け継がれてきた文化や精神が息づいている。しかしスーパー堤防計画によりこの街が地盤ごと全く違うものに塗り替えられようとしている。

### 人情あふれる街の賑わい

大島中の橋商店街をはじめ活気ある声が響く昔ながらの商店街が数多く残っている。緑日には露店が並び、大変多くの観光客が押し寄せる。江戸の下町風情が残る町並みは市街地の核となっている。

### 伝統・文化・江戸情緒

三年に一度行われる深川八幡祭りでは、大小あわせて120数基の町神輿が町内を練り歩き、江戸時代から脈々と世代を越えて受け継がれてきた区の「伝統」を感じることができる。

### 魅力あふれる水彩都市

東西南北を水路に囲まれた街で、区内には18もの川や運河があり、その長さは合計で約32kmにもなる。常に水と関わりを持って発展を遂げてきた地域で観光資源も「水」に関連が深いものが数多くある。

## 02 2-1 留まることしかできない現状



2つの川に挟まれた東京低地  
海抜ゼロメートル地帯では集中豪雨や高潮、台風、津波などの水害時に対処することが難しいとされている。災害時にゼロメートル地帯から避難する際、江東区や墨田区の主要な橋が崩落すれば、避難が不可能になる。約100万人が暮らす江戸川区西部と江東区東部などでは、2、3週間以上浸水が続く。

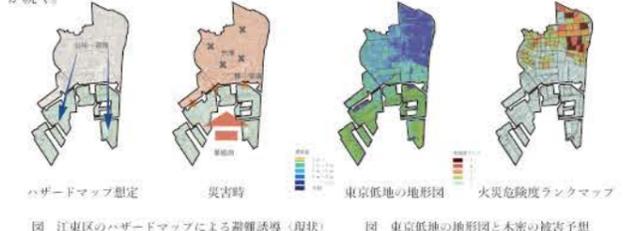


図 江東区のハザードマップによる避難誘導（現状） 図 東京低地の地形図と木密の被害予想

## 02 2-2 400年かけて壊されていく街

スーパー堤防計画  
スーパー堤防の完全な完成には約400年掛かると言われている。これを守っている、いざ災害に見舞われた場合、木末転倒である。低地にある住宅や商店街といった街を構成する要素がスーパー堤防計画によりタワーマンションやビルディング等に塗り替えられようとしている。しかしこういった無機質な建築は増築したり減築したりという調節が不可能である。それに対して増改築が可能な生物的な建築を守り、増やしていくべきである。

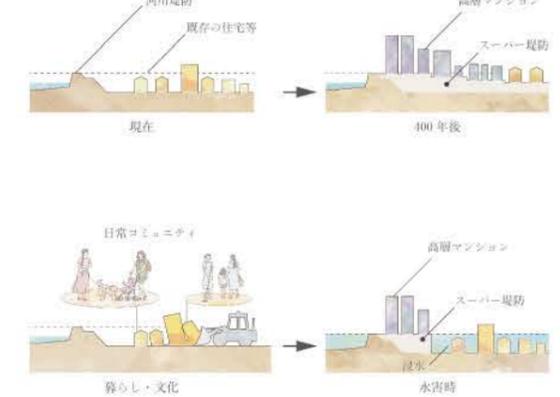
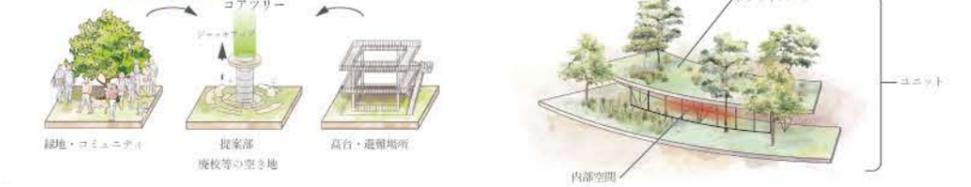


図 日常とともに成長して行く防災計画が必要である

## 03 3-1 生物的に成長する防災インフラとしての建築

- 必要なものを補う  
対象地域のコミュニティは範囲が小さく、人と人が近い。平面的な計画ではこれを疎かにしてしまいがちである。小さなスケール感で構成されているまちを壊してしまいかねない。スクラップアンドビルドではなく、必要な要素の積層により問題を解決していく。
- ポケットパークをつくる  
スラブに土を乗せ、公園化する。ユニットとユニットの間には建築空間が生まれ、積層されるごとに新たな空間が生まれる。



ネットワークの構築  
現在の住宅街ではそれぞれの家で個々の生活を完結してしまっている。生活の一部を街の外部へ開放することで集合の空間を創り出す。生活空間が屋外に分散されることで地域住民のネットワークが徐々に拡大していく。

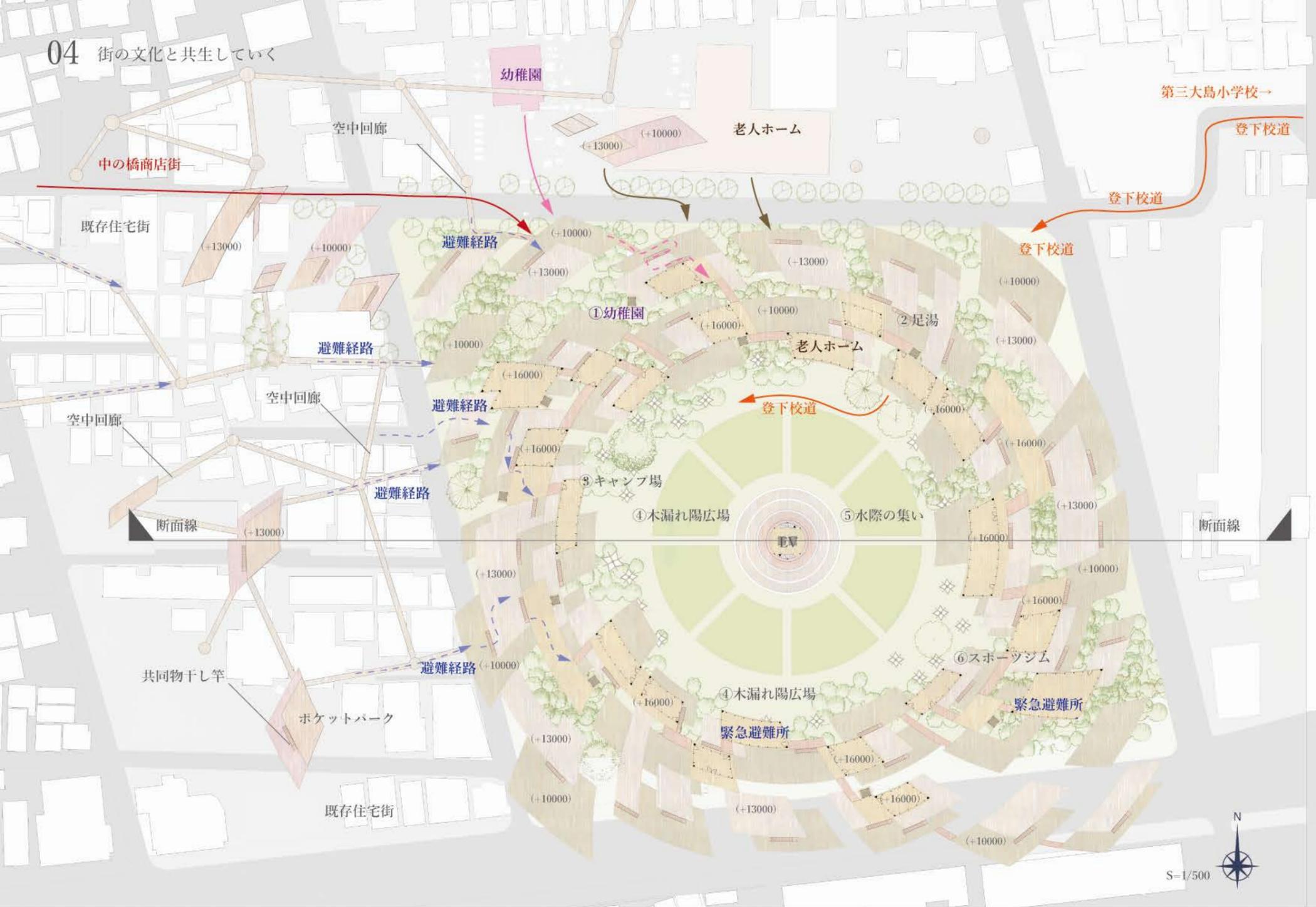


## 03 3-2 生物的に成長する防災インフラとしての建築

- 生物的に変化していく  
街に必要な機能がこの建築に反映され、ユニットが増改築を繰り返して周辺環境に呼応していく。さらに、木の根のように水インフラを張り巡らせ、ツルのように空中回廊を絡ませる。これにより水害時の浸水水位をできるだけ下げ、避難時のインフラを確保する。コアタワーを中心にポケットパークを基本としたユニットが集合することでタワーが出来上がる。このタワーには多種多様なサイズが存在し、水脈・空中回廊ともに街へネットワークしていく。そして、この建築が地域の里山的存在となり下町文化を次世代に継承してゆく場所となる。



04 街の文化と共生していく



05 災害時に機能が変換される建築

